



せたがや農福ファーム

せたそら

農業を起点に 地域のインクルージョンを 推進する！

せたがや農福ファーム「せたそら」における
dentsu Japanの取組み

(株)電通グループ
濱崎 伸洋



電通グループについて

“One dentsu”体制

- 電通グループは、世界約145か国・地域に広がる、約650社、約71,000名の企業集団。
- “dentsu Japan” “dentsu Americas” “dentsu EMEA” “dentsu APAC” の4地域体制で事業を運営。



dentsu Japan 概要



- dentsu Japanは、約150社、従業員23,000名の企業集団。
顧客企業は約6,000社におよぶ。

総合ビジネス・プロデュース	マーケティング・プロモーション・ コンサルティング	デジタル・テクノロジー & システム・ソリューション	メディア・コンテンツ	クリエイティブ制作
電通 電通アドギア 電通沖縄 電通九州 電通西日本 電通東日本 電通北海道 電通名鉄コミュニケーションズ 電通メディカル コミュニケーションズ 電通ラソウエイ アド電通大阪 ザ・ゴール	電通プロモーションプラス 電通プロモーションエグゼ 電通ライブ 電通tempo 電通PRコンサルティング ドリル 電通アイ・アンド・シー・パートナーズ 電通コンサルティング イグニション・ポイント	電通デジタル 電通総研 CARTA HOLDINGS セプテーニ・ホールディングス dentsu Innovation Studio 電通オペレーション・パートナーズ 電通クロスブレイン 電通サイエンスジャム 電通デジタルアンカー GNUS アイプロスペクト・ジャパン	IPG OOHメディア・ソリューション カラ・ジャパン dentsu X ジャパン 電通キャスティングアンドエンタテイン メント SPORTS Edge 電通ミュージック・アンド・エンタテイン メント 東京有明アリーナ	電通クリエイティブX 電通クリエイティブキューブ 電通クリエイティブフォース その他 電通コーポレートワン 電通そらり

広告

PR

販促

イベント

リサーチ

プロダ
クション

スポーツ

エンタメ

コンサル

システム
開発

コーポ
レート

Integrated Growth Partner

複雑化・高度化する企業課題から本質的課題を発見し、
統合的なソリューション “Integrated Growth Solutions” を提供する電通の姿勢。
広告やマーケティングを超えたより広い領域から顧客企業の成長をサポートし、
社会全体の成長への貢献を目指す。



Advertising
Transformation

広告の高度化・効率化を
実現する
広告変革領域



Business
Transformation

顧客企業の事業成長と
企業変革を実現する
ビジネス変革領域



Customer Experience
Transformation

最適なお客さま体験を
デザインする
カスタマーエクスペリエンス
変革領域



Digital
Transformation

マーケティング基盤の変革を
実現する
デジタル変革領域

dentsu Japanの障害者雇用



“人起点”の障害者雇用

- ・ 2023年1月のダボス会議にて、dentsu Japanの北風Chief Diversity Officer が障害者雇用に関する考え方をスピーチ。
その内容は、当社グループの障害者雇用のあり方を示す。

商品や工場をもたない電通グループの成長の歴史は
そこで働く人の可能性の拡張の歴史。

障害者雇用は、その一丁目一番地。

既存の事業で障害者が活躍できる環境を整えるのはもちろん、
目の前にいる障害者の強みを活かせる事業がなければ
それを一から創出し、自社の事業にしてしまう。

障害者の可能性の拡張に合わせて、会社も拡張する。
それが、dentsu Japanの障害者雇用。



dentsu Japan の障がい者雇用



- ・ dentsu Japanには、24年6月時点で405名の手帳取得者が在籍。
内訳は身体193名、知的122名、精神90名。
グループ各社がそれぞれの方針で障害者雇用を推進している。

① 特例子会社での雇用事例

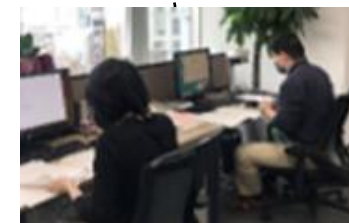
(株)電通そらり

(株)電通グループの特例子会社。知的・精神障害のある方が働く。
ゴミ回収、会議室清掃、事務補助等の業務の他、カフェや農業にも取り組む。



(株)電通総研ブライト

(株)電通総研の特例子会社。知的・精神障害のある方が働く。
会議室清掃、事務補助等の業務の他、コーヒー焙煎業務にも取り組む。



② 自社での雇用事例

(株)電通

身体障害のある方が多く働く。プランニングや営業業務等に従事。
会議室やエレベータなど、本社ビルのユニバーサル化を推進。



(株)電通デジタル

身体・知的・精神障害のある方が働く。コーポレート業務に従事する他、
アスリート雇用にも取り組み、2024パリパラリンピック代表選手も輩出。
昨年より農福連携事業にも取り組む。



(株)電通九州

身体・精神障害のある方が働く。高次脳機能障害や視覚障害のある方も活躍、
社外の賞も受賞。



(株)電通オペレーションパートナーズ

精神障害のある方を在宅勤務で雇用。
BPO業務に取り組む。

(株)ザ・ゴール

知的障害のある方を雇用。
コーポレート業務に取り組む。

dentsu Japanの農福連携



「農園そらり」の開設



- ・私が(株)電通グループの特例子会社(株)電通そらりに出向していた当時、メイン業務だったビル清掃以外の業務開拓に取り組む。
- ・2018年、(株)電通の福利厚生施設(東京都世田谷区)の敷地内の駐車場を農地にして、障害のある社員が働く農園を開設。
- ・収穫した野菜は社員食堂に納品したり社員向けに販売する他、港区役所の福祉売店、世田谷区役所のマルシェ等でも販売。
- ・社員は農業専従とはせず、ゴミ回収や事務補助等の業務とあわせてシフトを組んで従事。



※「農園そらり」は現在、同区内の喜多見の農地に移転し、運営を継続。

「農園そらり」からの学び

① 知的障害、精神障害と農業の相性のよさ

- 本社で働いているときは心身が不安定な社員が、農園に来ると別人のようにイキイキする。
- 有機農業は一般に手間をかけるほどよく育つ。障害があってもプロに負けない仕事ができる。
(生産性や計画性の問題は除く)

② 職業人としての成長

- 豊作だったり不作だったり、売れたり売れなかったりする経験を通じて、結果に対する執着や責任感が生まれ、自ら勉強したり提案したりするなど、明らかな成長が見られる。

③ 世の中の障害理解の促進

- 野菜は最高のコンテンツ。障害に興味がない人でも、野菜には目をとめる。
障害者が育てた野菜の販売を通じて、人々の障害理解が進み、バイアスも軽減する。



「世田谷区農福連携事業」 (せたそら)とdentsu Japan

「せたそら」の始まり

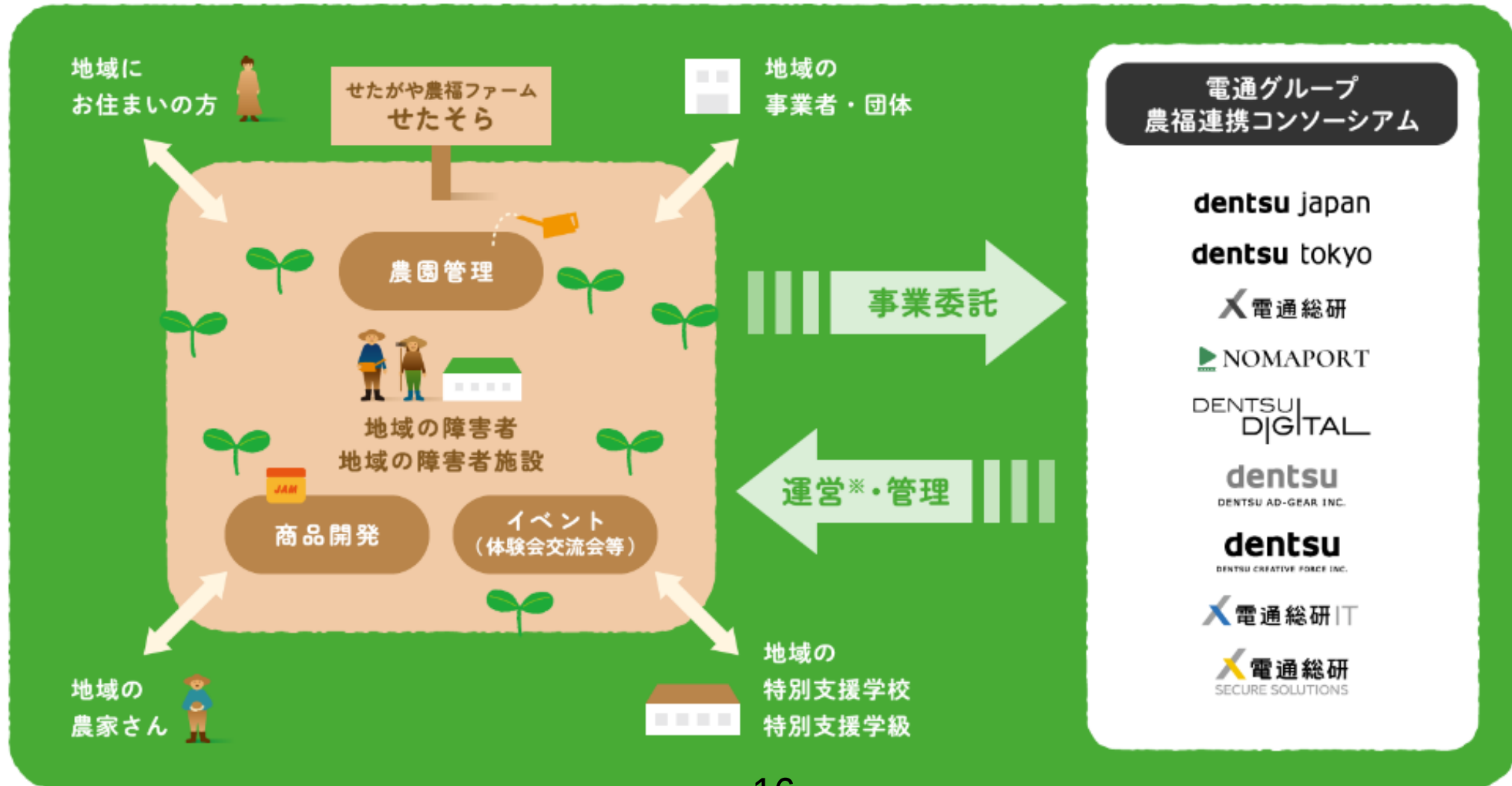
- 2020年、私がそらりから親会社に帰任、グループ全体の障害者雇用を担当。
- グループ会社の多くが「障害者の業務が少ない」「支援体制を用意する余裕がない」という意見を寄せる。また、「障害者雇用は負担でしかない」というネガティブなインサイトがあることも知り、「各社の雇用推進をサポートしたい」「障害者と共に働くことはJOYであることを知ってもらいたい」という意識が生まれる。
- 2021年、世田谷区が区内の「農地の保全」「障害者の工賃向上」を目的に「世田谷区農福連携事業」を立ち上げ、その運営主体を選定する公募を実施する。
- dentsu Japan 8社で「電通グループ農福連携コンソーシアム」を組成。
(社)ノーマポートも加わり、世田谷区の公募に参加し、無事受託。（受託会社は電通総研）
- 2022年3月、農園で初めてのイベントを実施（まだ、農園名は「粕谷2丁目農園」）

「せたそら」の想い



- ・めざしているのは「雇用を起点とした、地域全体のインクルージョン推進」。
- ・経済的な安定は、障害者が自立し、尊厳を保つために不可欠。
雇用はその一丁目一番地。
さらに、企業就労が難しい障害の方々にも、その恩恵が行き渡ること。
- ・障害者が施設やグループホーム等で暮らしていくにあたり、
地域の人々の理解や支援は不可欠。
農業を起点に、地域の人々の障害理解を促進する。
- ・都市農業ならではの農福連携を実現するため、行政とJA、農家さん等と
新しいカタチのパートナーシップを築く。

「せたそら」の全体像



「せたそら」の歩み ①

農園開き (2022年3月)

地域の障害者施設の利用者、職員の皆さんをお招きして、初めてのイベントを実施。畝づくりや種まき、青空茶会を楽しみました。この時点で、農園はなにもないただの更地。ここから、土づくりや休憩室や倉庫の設置等に取り組みます。



「せたそら」の歩み②

農作業体験会 (2022年6月～)

毎月、地域の障害者施設の皆さん向けに「農作業体験会」を実施。
障害の重さも特性もさまざまな方が、土にふれたり、体を動かしたり、
ただみんなのそばにいたり、オンリーワンの時間を楽しみます。



「せたそら」の歩み ③

就労実習（2022年6月～）

グループ5社を中心に雇用に向けた活動を開始。
地域の障害のある方々が、農作業や社会人としての基本を学びます。
これまでに計13回の実習を実施、都心に通勤しての就労が困難な方、
農業が好きという方の就労を支援してきました。



「せたそら」の歩み ④

障害者雇用（2023年2月～）

グループ5社が、地域の障害者の雇用を開始。
スタッフは現在11名（身体、知的、精神・発達）。
晴れの日も雨の日も、みんなで力をあわせて農園の管理や
農産物の栽培に取り組みます。



収穫 (2023年2月～)

農園では、化学農薬や化学肥料を一切使わずに農産物を栽培。

農業指導士より定期的に指導を受けながら、スタッフもYoutubeで勉強。

失敗も多いですが、収穫できたときのよろこびは格別です。



「せたそら」の歩み ⑥

地域で販売 (2023年5月～)

「地域の障害者インクルージョン推進」という使命のため、せたそらで収穫した農産物は、ほとんど地域で販売しています。飲食店に納品したり、地域のお店やマルシェで販売したり。野菜をきっかけとした障害理解を推進しています。



「せたそら」の歩み ⑦

加工品の開発、発注（2023年5月～）

収穫した農産物は、地域の障害者施設や事業者に加工を発注します。
障害者施設の工賃向上につなげるのはもちろん、
地元野菜を使ったユニークな商品をきっかけに、障害理解を推進します。



「せたそら」の歩み⑧

地域とコラボ (2023年10月～)

地域のビール醸造所より、醸造時に発生する「麦粕」を、地域の厩舎より「馬糞」を提供いただき、肥料として再利用する「循環農法」にもトライ。

ひきこもり支援のマルシェに協力して、当事者の社会参加のきっかけになったり、地域の方々と交流する「オープンファーム」を年2回開催したりします。



「せたそら」の歩み ⑨

ロゴと名前を作る (2024年4月～)

この農園は、地域の障害者や関係者みんなに愛される場所でありたい、そんな思いから、ロゴと名前の策定は、地域の障害者施設や職員、農園スタッフ他の皆さんの声を集めながら進めました。電通のデザイナーが作成した複数の候補案から、最後はみんなの投票で決定。

「せたそら」という名前の由来は、農作業体験会に参加したことのある方のコトバ、「ここにくると、空が大きくみえる」。

エントランスに看板も設置され、ようやく農園っぽい顔つきに。



「せたそら」の今後



「せたそら」の（割と近い）今後

- ・ なにより、有機農業の技術を向上させて、収穫を安定させる。
- ・ 雇用を拡大する。
- ・ それらを土台に、ユニークでオリジナルな商品をもっと地域の障害のある方々と開発し、みんなの可能性を拡張する。
- ・ もっと多くの事業者とコラボし、世の中の障害理解を促進する。
- ・ 障害者だけでなく、ひきこもりや認知症といった方々向けの体験会も実施して、よりユニバーサルファーム的な存在になる。
- ・ 世田谷区さんはもちろん、地域のJAや農家さんともっと連携し、「みんなが生きやすい地域づくり」のためのパートナー関係を構築する。

私たちは「せたそら」という場所から
企業ならではの、都市農業ならではの、
新しいカタチの「農福連携」をめざしたい。



せたがや農福ファーム

せたそら